

小学生(高学年)を想定したわかりやすい
DET(Disability Equality Training: 障害平等研修)のプログラム開発

田島明子＊1)、中谷高久2)、楠目昌弘3)、高橋祥二4)、
笠原賢二5)、大川速巳6)

1) 聖隷クリストファー大学、2) 浜松市社会福祉協議会、3) 障害平等研修フォーラム
4) 浜松市教育委員会、5) CILコネクト、6) 静岡県障がい者自立生活センター

【はじめに】

現在、浜松市社会福祉協議会では自主事業で小学生から高校生に対して福祉出前講座を実施している。義務教育での障害理解の啓発活動に大きな役割を担っている。

一方、2015年度の地域貢献事業研究費において、代表者は浜松市内での障害平等研修(Disability Equality Training、以下DETとする)を実施した。DETはイギリスで誕生したが、「障害とは何か」について、「医学モデル」ではなく「障害の社会モデル」的に理解をするための研修であり、障害当事者がファシリテーターになり、研修受講者と対話を行いながら、発見を促してゆく手法がとられている。「障害の社会モデル」では、障害を障害のある人の身体に帰属させるのではなく、障害から生じる不便は少数派に対する社会の側の無配慮から生じることを多数派である障害のない人たちがしっかりと認識し、解消に努めるべきという考え方を持つ。一昨年日本でも批准した障害者権利条約、2016年4月から施行される障害者差別解消法において「障害の社会モデル」は基本的な障害概念となっている。

上述した福祉出前講座であるが、障害を持つ人の経験を疑似体験し、サポート技術を改善することを目的とした内容となっている。DETは、サポート技術の前提にある、障害をどのようにとらえるか、について学習できる内容であるため、1回の出前講座のなかで双方を組み合わせることにより、障害のとらえ方、障害に対するサポート技術を一体化して学習でき、より有意義な啓発活動の機会になるのではないかと考える。しかしDETは、一般成人向けに研修内容が組まれているため、福祉出前講座が主に対象としている小学生にとってはより良い理解が困難な可能性もある。

そこで本研究では、**来年度以降の福祉出前講座で実際に使用可能な、小学生(高学年)でも理解しやすいようなDETのプログラム開発**を行うことを目的とした。

【方法】

次の手順にてプログラム開発とその検討を行った。**1)DET実施、2)プログラム検討、3)検討したプログラム内容にて小学生(高学年)向けに実施し、その結果を基にした再検討**、である。1)については共同研究者のなかでもDETがどのような研修かを知らない人がいたため、共同研究者のすべてがDETを経験できるようにした。2)については、その後、小学生(高学年)を対象とし、福祉出前講座の機会を用いて実施するにあたってのプログラム内容の検討を行った。また、DETファシリテーターを行い小学生(高学年)向けにDETを行った経験のあるA氏にインタビュー調査を行い、その結果をプログラム検討会議にて共有した。3)については、検討したプログラム内容を小学生(高学年)対象に実施し、小学生(高学年)から得られた反応を基に、今後の課題について整理を行った。

【プログラム検討会議実施状況】

回数	実施日	場所	内容
第1回	2016年12月16日	浜松市福祉交流センター	以下の内容にて実施した。 ・今後のスケジュール確認 2016年1月16日 DET実施 その後第2回会議にてプログラム検討2017年3月に、検討したプログラムにて小学生向けDETを実施する 本研究について報告書作成をする ・福祉出前講座についての説明 ・DETについての説明 ・意見交換
DET実施(2017年1月16日)			
第2回	2017年1月16日	浜松市福祉交流センター	DETの参加・見学を受け、小学生向けに行う際に配慮が必要な点について意見交換を行った。以下のような意見があがった。 ・時間: 90分程度がよい ・内容: アニメーション・絵を使うなど理解しやすい内容にする、障害当事者の差別体験談を盛り込む ・規模: クラス単位を想定
第3回	2017年2月9日	浜松市福祉交流センター	A氏の参加もあった。 各自が教材・構成について考えてきたことを報告し、田島よりA氏へのインタビュー調査結果を報告した。それらを基に小学生向けDETの内容の整理を行った。
第4回	2017年3月9日	浜松市福祉交流センター	中谷が前回会議で整理したDETの内容をPPTにまとめたものについて、不足や変更が必要な箇所等についての最終的な確認を行った。
小学生向けDET実施(2017年3月20日)、その後振り返り			

【A氏インタビュー結果】

○経緯
A県において、人権教育のモデル校にA区のなかの近所の学校が選ばれた。それを地区の社会福祉協議会がつないでくれて、2016年度と2015年度に、5年生対象に実施した。

○教材
・教材は大人向けと同じものを使った。それに加え、障害を持った人が社会に出た際に困ったことを再現した短いビデオを何本か使用した。

○方法
①「障害って何だろう」という質問に対して、紙に書いてもらった。
②車椅子に乗っている人の絵を用い、どこに障害があるかをたずねた。車椅子ユーザーの人にもDETに参加をしてもらい、具体的な経験を話してもらった。
③障害を持った人が社会に出た際に困ったことを再現した短いビデオを何本か見てもらった。また、車椅子ユーザーの人に「こういう経験ありますか」と聞くと「この間20分間エレベーターの前で待ちました」という話が語られたので「みんな、これってどうすればいいのかな」と投げかけ小学生に話し合ってもらった。
④もう一度「障害って何だろう」という質問をし、紙に書いてもらった。最後に、障害に対する見方の変化を確認し、社会や環境が変わることの大切さを確認した。

○時間
40分を2回行ったが、その間に休憩を入れたので、全部で100分程度だった。

○場所・人数・グループ構成
体育館で実施した。対象は5年生であり、80～90人いた。4人で1グループとなり、話し合うときにはグループで話し合ってもらった。

○話しかける時の工夫
・大人と変わらなかった。ただ、具体的な事例をいたるところに入れ込むことや、当事者の人に具体的な経験について話をしてもらうよう配慮した。
・反省として、今回は、車いすユーザーの人しか参加してもらえなかったので、視覚障害者や聴覚障害者など、様々な障害を持つ人に来てもらい、自身の経験を語ってもらうとよいと思った。
・いろいろな教材があるとよいと思った。
・簡単な言葉を使う。ただし、内容まで変えないように気を付けた。
・子どもたちの話し合いのために多くの時間を作れるよう心がけた。

【小学生向けDET実施結果】

(1) 従来型のDETと小学生向けDETの違い

	従来型のDET	小学生向けDET
時間	3時間	90分
内容構成	①参加者に「障害とは何か」を訊ねる ②車いすに乗る男性の絵(図1)を見てどこに障害があるかを考え、答えてもらう ③健常者が少数派で障害者が多数派になった仮想社会(12場面ある)についてのビデオ上映 ④ 箱に星形のもの入れる際どのように入れるかを考え、答えてもらう ⑤終了時にも「障害とは何か」を訪ね、最初との変化を参加者で共有する	→実施 →実施 →内容の理解が難しく、時間も要するため、障害を持つ人が社会に出た際に困った経験を絵で示したもの、短いビデオで示したものを提示 →実施 →実施

(2) 小学生向けDET実施結果

場所: 浜松市福祉交流センター2階大会議室
日時: 2017年3月20日13時から14時30分まで実施
ファシリテーター: 共同研究者である笠原、大川が中心となり、楠目がサポート
対象: 小学4年生から6年生
参加者: 兄弟で参加したいとのことで低学年生(1～3年生)と高校生の参加希望もあったため、参加を認めた。参加者は16名であったがそのうち低学年生は6名、高校生は1名であった。
実施方法: 3グループに編制、低学年生のそばには高学年生やファシリテーターが常時いるよう配慮を行った。
周知方法: 新聞広告や知人の紹介などにより行った。
【開始時と終了時の障害の捉え方の変化】

開始時	終了時
ふつうのことができない	社会が優先しなければいけない存在
ケガをしてしまって、目などが不自由な人	まわりの人で支え合ったり、助けたりしていくもの
日常生活の妨げになるもの	障害者本人だけの問題ではないこと
めんどろな	とろのぞけるもの
けががもと	みじか
自分ではできないこと	ほかの人とちがうこと
ほかの人と同じことができない	したいことがうまくできないこと
病氣やけが	したいことが自由にできないこと
耳の聞こえない人や目の見えない人	エレベータで車いすがのりたくてもエレベータの中は人がいっぱい、ちがう階に行きたいのに行けない。のろうとしてもうしろにいた人たちがどんだんぬかしていつてしまうこと
体が不自由な人	くるしんでいる人、やりたいことができない人、やりたいことが思いどろにできない人
体のどこかが動かなくなる。体を自由に動かせない	自分のやりたいことができない。そのせいでとても困ることにくわすことがふえる
びょうき、けが	思うようにいかない、たいへんな人、びょうきやけが
目がふじゆうな人	やりたいことができない人
手や足、目、耳がふじゆうの人	みんなと同じようにできない、ケガでなにもできない
いやなこと	いやなこと
ふつうの人とおなず生活ができなくなっていること	目がふじゆうだったり、足がうごかなかったり、ふつうの生活ができなくなったりすること

【考察・まとめ】 上記の障害の捉え方の変化を見ると、障害が多数派である健常者の意識の変化で変わるものであるという認識に至った参加者は、16名中3名、障害を否定的な経験として捉えるのではない違いや身近な事として捉えていた参加者が2名であった。今後、障害問題を自分の事として捉える視点の育成につながるさらなる教材開発の工夫が必要である。